

平成 26 年度

病虫害発生予察特殊報 第 2 号

平成 26 年 9 月 30 日
茨城県病虫害防除所
TEL : 029-227-2445

チバクロバネキノコバエの発生について

害虫名：チバクロバネキノコバエ（別和名：チビクロバネキノコバエ）

学名：*Bradysia difformis* Frey (Synonym : *Bradysia agrestis* Sasakawa)

発生作物：イチゴ

1. 発生確認の経過及び県外での発生状況

- (1) 平成 26 年 1 月中旬，県央地域のイチゴほ場（ハウス）において，イチゴ葉の外縁が黄化・褐変し，外葉が枯死する株がみられ（写真 1, 2），被害株のクラウン部を加害しているハエ目幼虫が確認された（写真 3, 4）。このため同ハウス内に発生していたハエ目成虫及び幼虫を採集し，横浜植物防疫所を通じて東京大学大学院総合文化研究科の須島充昭博士に虫体（幼虫は室内で飼育して羽化させた）の同定を依頼した結果，本県では未発生のチバクロバネキノコバエと判明した。
- (2) 本種は，一般には，キュウリ，メロン，花き類での被害が多いが，平成 10 年に三重県，平成 16 年に長野県，平成 22 年に長崎県，平成 24 年に佐賀県でイチゴにおいて同様の発生が確認されている。

2. 形態の特徴

本種はハエ目クロバネキノコバエ科の昆虫で，体長は雌成虫が約 1.8～2.1mm，雄成虫が 1.9～2.3mm であり，頭部は黒色，胸部と腹部は暗褐色，翅は褐色を帯びた透明である（写真 5）。老齢幼虫の体長は約 4mm であり，頭部は光沢のある黒色，体は白色を帯びた透明である。

3. 生態の特徴

成虫は未熟な有機物に誘引され産卵する。幼虫はこれを餌とし，大量に発生した場合，幼虫の一部が植物の地下部や地際部などを加害する。卵から成虫に至るまでの一世代は，25℃の気温条件下で 15 日程度と短い。

4. 被害の特徴

イチゴでは，幼虫が根やクラウン部等を食害する。そのため，定植後新芽の伸びがよくない生育異常株がみられ，展開した葉の葉柄が赤みを帯びる。クラウン部が湿っている状態が多い高設栽培などで被害事例が目立つ。

5. 防除対策

- (1) 未熟な堆肥を施用すると成虫を誘引し産卵を促すので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む基肥を施用する場合には十分に土壌混和する。
- (2) 周辺部に雑草の枯れ葉や古株、農作物の収穫残渣が大量にある場合、堆肥舎がある場合には、発生源になりやすい。
- (3) ハウス内への侵入を防ぐため、ハウスの開口部に1mm目合い以下の防虫ネットを設置する。
- (4) 薬剤防除を行う場合は、ベストガード水溶剤を散布する。使用の際は、ミツバチへの影響に注意する(表)。



写真1 チバクロバネキノコバエ幼虫の寄生によるイチゴ外葉の褐変



写真2 被害の進行したイチゴ葉における外縁部の褐変症状



写真3 クラウン部に寄生するチバクロバネキノコバエ幼虫



写真4 チバクロバネキノコバエ幼虫



写真5 チバクロバネキノコバエ成虫

表 イチゴのチバクロバネキノコバエに登録がある農薬(平成26年9月24日現在)

薬剤名	希釈倍数(倍)	使用時期	本剤の使用回数(回)
ベストガード水溶剤	2000	収穫前日まで	3回以内

※農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法、注意事項等を必ず確認のうえ使用してください。